

# 『万葉集』 東歌の地名と地名表象

和田 明 美

## 1 はじめに

現存最古の歌集『万葉集』二〇巻には、4516首ほどの歌が収められている。また、『万葉集』には地名を詠む「地名歌」が多く収められている。畿内を中心に本州各地の歌を収め（約1200カ所、延べ約2800例）、三河・尾張や遠江を詠む歌も少なくない。とりわけ古代遠江・信濃以東の歌を収める『万葉集』巻一四の東歌230首には、106カ所の地名が詠まれており、延べ数は187を数える。東歌に関する私の調査に従えば、東歌のみに見られる地名は79カ所、その一方で近畿圏を中心とする歌巻に詠まれた地名も24カ所認められる。東国圏の歌を収める巻二〇所収の防人歌と比較した場合、東歌の「地名歌」の比率は高く（東歌58%・防人歌33%）、東国圏固有の「地名歌」も少なくない。しかるに、東国圏の防人歌と一致する東歌の地名は題詞や左注を含めても8カ所（4%）と少数である。そこで小稿では、『万葉集』所収の東歌の「地名歌」について、国別の特色を探るとともに東歌の「地名歌」の特質を明らかにしたい。

## 2 『万葉集』の「あづま」と東歌

—古代道制としての東海道・東山道との関わり—

『万葉集』には「あづま」を詠む歌は14首あり、〔国・坂・道・女・男・人・〇〕と結

合しつつバリエーション豊かに東国を表している。用例数を示せば、「東の国」5例、「東・東男（をとこ・をのこ）」<sup>あづま</sup>「東道」各2例、「東の坂」<sup>あづま</sup>「東女」<sup>あづまぢ</sup>「東人」<sup>あづまをみな</sup>各1例となる。「東道」以外の「東」関連語は、東歌はもちろん防人歌にも見られない。しかも「東道」の歌は、2首とも東歌の「未勘国歌」である。1首は「雑歌」、他の1首は「相聞歌」として2首が別の部立に収められている。「東道」「手児の呼坂」<sup>よびさか</sup>「越ゆ」等を共有する歌の内容からすると、これら2首の歌は、東国民謡の要素をそなえた男女の贈答歌、もしくは恋・逢瀬・別れの歌である可能性が高い。現在「東道の手児の呼坂」の場所は明確ではないが、「東道」は都から東国への道と推察される。これを古代東海道と見なして、駿河の国の女神が夜な夜な「男神」を「呼ぶ」伝承、もしくは「手児」（女）が男を「呼ぶ」イメージを重ねながらの読解が通行している。なかでも水島義治『万葉集全注 巻十四』は、推定地として「〔A〕薩埵峠（清水市興津町と庵原郡由井町との間）」「〔B〕七難坂（庵原郡蒲原町の東端）」「〔C〕静岡市手越の盗人坂、または手越に近い坂」の3カ所をあげている。

○東道の手児の呼坂<sup>よびさか</sup>越えがねて山にか寝むも宿りはなしに（⑭・三四四二）

○東道の手児の呼坂越えて去なば我は恋ひむな後は相寝とも（⑭・三四七七）

「東人」は東国の人を表す語で、『類聚名義抄』には「邊鄙」に「アツマト」の訓があり、右下に「ヒト」の書き添えがある。『万葉集』の「東人」は、巻二の「久米禪師娉<sub>二</sub>石川郎女<sub>一</sub>時歌五首」の1首に見られる。

●東人の荷前の箱の荷の緒にも妹は心に乗りけるかも (②・一〇〇)

この歌の前の4首は、「信濃の真弓」(九六・九七)「梓弓」(九八・九九)等、東国産の「弓」を序詞や枕詞として「引く」ことを詠む歌である。しかも、弓を引く行為に女性を誘う意を重ねている。弓を作るのに適した梓の木の産地であった信濃の国は、古来、「梓弓」の産地としても知られていた。『続日本紀』の「信濃国献<sub>二</sub>梓弓一千廿張<sub>一</sub>。以充<sub>二</sub>大宰府<sub>一</sub>」(大宝2年3月27日)は、そのことを知るてがかりになる。特に当該歌は、禪師の心を占有してやまない石川郎女への思いを詠んでいる。「東人の荷前の箱の荷の緒にも」は、心に重く乗った重量感や濃密な恋心を具象化する序詞として有効に機能している。

「心に乗る」は成句的に用いられており、「妹は心に乗りけるかも」は類歌が多い。特に「心に乗る」8首中6首が「妹は心に乗りけるかも」の表現形式をとっている(②一〇〇・⑩一八九六・⑪二四二七・二七四八・二七四九・⑫三一七四)。東歌には、「妹は心に乗りけるかも」形式の歌はまったく見られないものの、仲の絶えた「妹」を思い「心に乗りてここは悲しけ」と詠む相聞歌1首が、「雲」を素材とする歌を集めた11首中の8首目(未勘国歌)に収められている。

○白雲の絶えにし妹を何為ると心に乗りてここは悲しけ (⑭・三五一七)

古代日本語「思ふ」の「おも」は、「重し」

と同根であり、古代日本人は重量感を伴って人や事物を思ったのである。右の東歌の「何為ろ」「ここは」「悲しけ」は東国方言であるが、古代日本の東西を問わず「心に乗る」行為や思考は同一であったことを、左の東歌が証している。

●春さればしだり柳のとををにも妹は心に乗りけるかも (⑩・一八九六)

●大船に葦荷刈りつみしみにも妹は心に乗りけるかも (⑪・二七四八)

しかし、久米禪師の歌の序詞は、近畿圏の民謡的な他の歌の序詞とは異なって、東国の「東人荷前」を歌材としている。「荷前」は、毎年地方から朝廷に奉る貢物の初穂のことで、毎年十一月には荷前の使が遣わされた。「荷前の箱」は、初穂の品を収めた箱を表しており、東国はそれを馬で運んだようである。『祝詞』には、「荷前」の東国陸路の運搬に関して「陸より往く道は、荷の緒縛ひ堅めて」(祈年祭)とある(注1)。『万葉集』に1首のみ見られる「荷前」も、東国から朝廷へ奉られた品である。それゆえ、「東人の荷前の箱の荷の緒」は、しっかりと結ばれていたものと推察される。久米禪師の詳細は明らかではないが、久米氏出身で禪師(特殊な僧侶)になった男であろう。石川郎女との恋も、題詞の「娉」や5首の歌から推察するより他ないが、歌材や表現内容から察する限り、久米禪師は東国と何らかの関係があったのではないだろうか。いずれにせよ、禪師はあえて東国の素材をモチーフとして、ユーモアを交えわが恋をシンボライズしたのである。われわれは、都の景物ではなく、あえて東国圏の「信濃の真弓」や「東人の荷前の箱の荷の緒」によって、郎女との恋を具象化した禪師の意図をも読み取る必要がある。少なくとも、「信濃」「真弓」「東人」「荷前」「荷の緒」等の東国素材をモチーフとして形象化した禪師の歌

表現には、古代東国や東国圏に対する都人の価値観が反映していると見なされる。

ところで、「東」を詠む歌のなかには「鳥が鳴く」を枕詞とする歌が9首認められるが、東歌や防人歌には「鳥(鶏)が鳴く東の国」「鳥(鶏)が鳴く東男」「鳥(鶏)が鳴く東の坂」「鳥(鶏)が鳴く東」等の表現はまったく見られない。特に「鳥(鶏)が鳴く東」は、東国圏外の柿本人麻呂や大伴家持・池主らが東国を詠む際に使用しているのである。

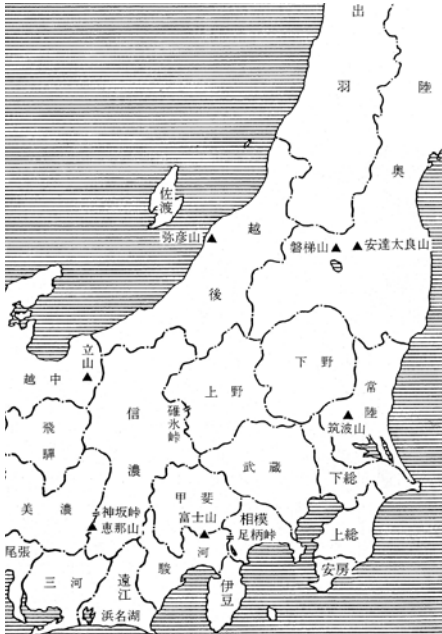
- かけまくも ゆゆしきかも 言はまくも  
あやに恐き…食す国を 定めたまふと  
鶏が鳴く 東の国<sup>を</sup>の 御軍士を 召したまひ  
てちはやぶる 人を和せと まつろはぬ  
国を治めと 皇子ながら 任けたまへば  
大御身に 大刀取り佩かし 大御手に 弓取り持たし 御軍士を 率ひたまひ… (②・一九九・人麻呂)
- 鶏が鳴く東男<sup>を</sup>の妻別れ 悲しくありけむ  
年の緒長み (⑩・四三三三・家持)

桜井満氏は、柿本人麻呂の高市皇子挽歌(696年)における「壬申の乱の叙述」を「鳥が鳴くあづま」の最古の例と見定めた上で、「鳥が鳴くあづま」を「大和ひとの東国観の表れ」と見なしている<sup>(注2)</sup>。先の禪師の東国素材に基づくユニークな歌表現と、「鳥(鶏)が鳴く東の国」「鳥(鶏)が鳴く東男」「鳥(鶏)が鳴く東の坂」「鳥(鶏)が鳴く東」に表れた都人の東国観には通底するものがある。これらの歌以外にも『万葉集』には「東」が2例が認められる。巻九・一七五九の「筑波の山」での「かがふ耀歌」に関する「耀歌者<sup>東</sup>俗語曰<sup>か</sup>賀我比<sup>ら</sup>」(2行割注)と、巻一四の総題表記としての「東歌」である。

さて、東歌230首の部立は、〔雑歌・相聞・防人歌・譬喩歌・挽歌〕からなる。「雑歌」22首(9.6%)「相聞往来歌」188首(81.7%)「譬喩歌」14首(6.1%)「防人歌」5首(2.2%)「挽歌」1首(0.4%)の順に編まれており、約82%を相聞歌が占めている。【表一】はそれを示したものである。東歌230首は、国名の

【表一】万葉集の東歌の国別歌数

	国名	雑歌	相聞	譬喩歌	防人歌	挽歌	合計	備考
東海道	遠江		2	1			3	
	駿河		5	1			6	
	伊豆		1				1	
	相模		12	3			15	
	武蔵		9				9	771年東山道より東海道へ
	上総	1	2				3	東歌に安房の国名なし、718年上総から分国、741年再併合、757年再分
	下総	1	4				5	
	常陸	2	10				12	
東山道	信濃	1	4				5	
	上野		22	3			25	歌数は最多
	下野		2				2	甲斐・出羽の国名なし
	陸奥		3	1			4	
不明	不明	17	112	5	5	1	140	
合計		22 (9.6%)	188 (81.7%)	14 (6.1%)	5 (2.2%)	1 (0.4%)	230 (100%)	



【図一】万葉集の東歌圏  
(遠江・信濃以東) 地図

明らかな「勘国歌」140首と国名未詳の「未勘国歌」90首に二分され、4対6の割合で「未勘国歌」が優位に立つ。東歌は古代日本の東国の言語文化を背後にするとともに、古代道制とも無関係ではない<sup>(注3)</sup>。東海道・東山道を含む「七道」の初出は<sup>(注4)</sup>、大宝律令施行伝達のための使者の派遣を記した『続日本紀』であり、中央と地方を放射線状に最短で結ぶ「七道」は、八世紀初頭に完備したと見て大過あるまい<sup>(注5)</sup>。「勘国歌」は、古代律令制下の東国 = 遠江・信濃以東の歌を、古代道制下の京(中央)と東国(地方)を結ぶ二道 = 東海道・東山道の国別に編むことを旨としており、その後「未勘国歌」を配置している。東国の範囲を遠江・信濃以東と捉えている点では、巻二〇所収の「防人歌」も同様である<sup>(注6)</sup>。

東歌の国名未詳の「防人歌」5首と「挽歌」1首は措き、道制や国との観点で「雑歌」「相聞歌」「譬喩歌」の編纂を見るとどうであろうか。「雑歌」は、4カ国の歌を《上総・下総・

常陸・信濃》の順に編み、「相聞歌」は、東海道 = 《遠江・駿河・伊豆・相模・武蔵・上総・下総・常陸》に続いて、東山道 = 《信濃・上野・下野・陸奥》の順に配置・編纂している。さらに「譬喩歌」は、東海道 = 《遠江・駿河・相模》、次いで東山道 = 《上野・陸奥》の5カ国の歌を所収する。つまり東歌においては公的な儀礼歌ではなく、私的な「相聞歌」がもっとも古代道制や所属国を反映しており、実際に東海道8カ国に続いて東山道4カ国の計12カ国の歌が順次位置づけられているのである<sup>(注7)</sup>。しかも未勘国歌のなかには、古代律令制の東国圏・東海東山両道に属さない国の歌も見られる。尾張国の「地名歌」もそれに該当する<sup>(注8)</sup>。

### 3 用例数から見た東歌の地名

犬養孝氏は『万葉集』に見られる地名は約1200カ所、延べ約2860例(題詩と左注含む)とする<sup>(注9)</sup>。しかし、これらの地名のなかには地名か否かの認定、および場所の特定をめぐり諸注に異同があるものも少なくない。東歌と防人歌の地名歌についても同様である。【表二】は、巻十四所収の東歌と巻二〇所収の防人歌の地名に関する実際の調査に従い、分類を試みたものである<sup>(注10)</sup>。まず、地名の有無により「地名歌」と「非地名歌」に二分し、「地名歌」に関しては民謡の特質を備えた「地名初句歌」に注目した。また東歌は、「勘国歌」と「未勘国歌」との別も考慮に入れて二分した。

東歌と防人歌の「地名歌」と「非地名歌」の比率は約6対4で東歌が優位に立つ(防人歌は約3対7)。しかも、東歌「勘国歌」の「地名歌」が98%と高値であるのに対して、「未勘国歌」における「地名歌」は33%、また「地名初句歌」に関しては、「勘国歌」78%に対して「未勘国歌」20%と、「勘国歌」が「未

【表二】東歌と防人歌の地名歌

	東歌	勘国歌	未勘国歌	防人歌
歌数	230	90	140	93
地名歌	134(58%)	88(98%)	46(33%)	31(33%)
非地名歌	96(42%)	2(2%)	94(67%)	62(67%)
地名初句	94(41%)	70(78%)	28(20%)	13(14%)

勘国歌」の約4倍に相当する。東歌の平均「地名初句歌」41%は防人歌の14%よりはるかに高いが、特に「勘国歌」の「地名歌」「地名初句歌」がその比率を高めていることが判然とする。これに「序詞」の使用率を重ねるとどうであろうか。伊藤博氏によると、『万葉集』の序詞の平均使用率は16%である。しかるに東歌は40%を占めている。東歌は、近畿圏の民謡的な歌からなる巻十一・32%巻十二・28%をも上回っている<sup>(注11)</sup>。つまり、東歌の「地名歌」ならびに「地名初句歌」の傾向は、序詞のそれと軌を一にしており、近畿圏の民謡的な歌に対しての東国圏の民謡的な歌の性質を反映していると見なされる。

東歌に詠まれた地名総計は187、異なり106地名であるが、東歌圏の地名は総数156、異なり77地名である。これらのうち2例以上の地名は109例、孤例の地名は78例(題詞・左注含8地名)で、使用度数1の地名が78例・42%を占める。使用度数の高い地名は、「上毛野」13例(国名)、「足柄」(足柄の山・足柄山各1例含む)「伊香保」(伊香保嶺・伊香保の嶺ろ・伊香保風・伊香保せ・伊香保の沼各1例)「筑波」(筑波嶺7例・筑波山1例含む)各9例、「武蔵」7例(武蔵野6例・武蔵嶺1例)「真間」6例(真間の浦廻1例含む)、「富士」5例(富士の嶺1例含む)。これら使用度数5以上の地名のうち、東歌にしか見られない地名は、「上毛野」「伊香保」「武蔵」(防人歌左注あり)であり、近畿圏とは異なる東国地名の様相がうかがわれる。

とりわけ上野の東歌の「勘国歌」は25首

と最多であるが、「未勘国歌」をも併せた地名歌に関しても、上野は他国を凌ぎトップに立つ。地名総数・異なり地名数も同様で、総数47(25%・東国圏地名の30%)、異なり20地名(13%・東国圏地名の26%)である。しかも東歌でのみ使用される地名の占める比率が高い。「碓氷」以外はすべて東歌での使用であり、東国圏以外を使用を見ない。集中2例の「碓氷」も、実際には東歌の「碓氷の山」と防人歌の「碓氷の坂」のみであることから、上野の東歌の地名は、すべて東国圏での使用と見て大過ないであろう。

【表三】の「万葉集国別東歌地名表」のうち、○を付したものは東歌のみの地名であり、●は近畿圏・中央の歌にも詠まれた地名、また◎は防人歌にも見られる地名である。一見してわかるように、東歌と防人歌との共通の地名は、東海道に属する「多摩」「常陸」、東山道「碓氷」と少数である。また、東歌・防人歌とともに中央の歌にも見られる地名は、東国の「遠江」「駿河」「足柄」「筑波」の4地名に西海道「筑紫」を加えた5地名である。東歌と他巻共通の地名が24(東国圏17・以外6例+未詳1例)ある一方で、79地名は東歌独自の地名と見なされる(東国圏57)。

古代東海道の遠江国の地名についてはどうであろうか。「引佐細江」のみが東歌地名であり、「伎倍」「籠玉」「遠江」は『延喜式』所収の公的地名であるとともに集中他巻の「籠玉の伎倍が竹垣」(⑪二五三〇)や「遠江の吾跡川」(⑦・一二九三・人麻呂歌集)等にも詠まれている。しかも、「引佐細江」「伎

【表三】万葉集国別東歌地名表

国名	地名	数	万葉集全例 【東歌詳細と備考】〈他の備考〉
東 国 圏 ・ 東 海 道	遠江国	● 伎倍	2 3例 【伎倍の林・伎倍人各1例】 〈 <sup>あらたま</sup> 麗玉の伎倍が竹垣①二五三〇〉
		● <sup>あらたま</sup> 麗玉	1 2例 〈 <sup>あらたま</sup> 麗玉の伎倍が竹垣①二五三〇〉
		○ 引佐細江	1 1例
		● <sup>とほつあふみ</sup> 遠江	1 2例 〈 <sup>あど</sup> 遠江の吾跡川⑦一二九三人麻呂歌集〉 * 〈遠江②四三二四〉
	駿河国	● 富士	5 15例 【富士の嶺1例含】
		○ <sup>あ</sup> 安努	2 2例
		○ 手児	2 2例 【手児の呼坂2例】
		● 安倍	1 2例 【安倍の田】 〈安 <sup>いちぢ</sup> 倍の市道1例③二八四春日老〉
		○ 志田	1 1例 【志田の浦】
		● 駿河	1 7例 【駿河の海】 * 〈駿河の嶺 <sup>ら</sup> ②四三四五〉 〈駿河③二八四春日老・三一七赤人〉 〈駿河の国③三一九高橋虫麻呂〉 * 左注
	伊豆国	● 伊豆	2 1例 【伊豆の高嶺1例】 3例 【伊豆の海1例】 2例 〈伊豆手舟2例②四三三六・四四六〇家持〉
	相模国	● <sup>あしがら</sup> 足柄(あしがら)	9 6例 【足柄の山・足柄山各1例含】 * 〈足柄②四三七二〉 〈足柄の峰②四四二一〉 〈足柄の御坂②四四二三〉
	○ 鎌倉	3 3例 【鎌倉山1例含】 * 左注	
	○ 相模	2 2例 【相模嶺・相模道1例】 * 左注	
	○ 箱根	2 3例 【箱根の山・箱根の嶺各1例含】 〈足柄の箱根1例⑦一一七五羈旅作〉	
	○ 安伎奈	1 1例 【安伎奈の山】	
	○ 芝付	1 1例 【芝付の三浦崎】	
	○ 土肥	1 1例 【土肥の河内】	
	○ <sup>み</sup> 御宇良	1 1例 【三浦崎】	
	○ 見越	1 1例 【見越の崎】	
	○ 水無	1 1例 【水無の瀬川】	
	○ <sup>よろぎ</sup> 余呂伎	1 1例 【余呂伎の浜】	
	○ <sup>わを</sup> 和乎可鷄	1 1例 【和乎可鷄山】	
武蔵国	○ 武蔵	7 7例 【武蔵嶺1例・武蔵野6例】 * 左注	
	○ 入間	1 1例 【入間道】	
	○ 宇奈比	1 1例	
	○ 小菅	1 1例 【小菅ろの浦】	
	● <sup>さきたま</sup> 埼玉	1 2例 【埼玉の津】 〈埼玉の小埼の沼⑨一七四四〉	
	○ 多摩	1 2例 【多摩川】 * 〈多摩の横山②四四一七〉	
上総国	○ 安波	1 1例 【安波峰ろ】	
	○ 馬来田	2 2例 【馬来田の嶺ろ2例】 * 左注	
	● 海上	1 2例 【海上潟】 (下総国含か) 〈海上潟⑦一一七六〉	

東 国 圏 ・ 東 山 道	下総国	● 真間 ● 葛飾	6 4	1例【真間の浦廻1例含】 10例 *左注
	常陸国	● 筑波 ● 小筑波 ○ 麻久良我 ○ 許我 ○ 阿自久麻 ○ 葦穂 ○ 安斉可 ○ 伎波都久 ○ 浪逆 ◎ 常陸	9 3 3 2 1 1 1 1 1 1 1	21例【筑波嶺7例・筑波山1例含】*〈筑波②四四一八〉〈筑波嶺②四三六七・四三六九〉〈筑波の山②四三七一〉 5例【小筑波（の）嶺ろ各1例含】 3例 2例【許我の渡1例含】 1例【阿自久麻山】 1例【葦穂山】 1例【安斉可潟】 1例【伎波都久の岡】 1例【浪逆の海】 2例【常陸なる浪逆の海】*〈常陸さし②四三六六〉
	信濃国	● 信濃 ○ 石井 ○ 宇良野 ○ 大家 ○ 須賀 ○ 筑摩 ○ 埴科	3 1 1 1 1 1 1	6例【信濃道1例含】*左注 1例 1例【宇良野の山】 1例【大家が原】 1例【須賀の荒野】 1例【筑摩の川】 1例【埴科の石井の手見】*左注
	上野国	○ 上毛野 ○ 伊香保 ○ 佐野 ○ 安蘇 ○ 多胡 ○ 多杼里 ○ 安波路 ○ 伊波保 ○ 伊奈良 ◎ 碓氷 ○ 可保夜 ○ 久路保 ○ 子持 ○ 利根 ○ 新田 ○ 丹生 ○ 麻具波思麻度 ○ 乎度 ○ 小新田 ○ 小野	13 9 4 3 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	13例 *左注 9例【伊香保嶺・伊香保の嶺ろ・伊香保風・伊香保せ・伊香保の沼各1例含】 4例【佐野田・佐野山か各1例含】 3例【安蘇山1例含】【安蘇の川原1例】（下野国含） 2例【多胡の嶺・多胡の入野各1例】 2例 1例（三四〇五或本歌・非地名か） 1例【伊波保ろの祖】（伊香保の訛か） 1例【伊奈良の沼】 2例【碓氷の山1例】*〈碓氷の坂②四四〇七〉 1例【可保夜が沼】 1例【久路保の嶺ろ】 1例【子持山】 1例【利根川】 1例【新田山】（小新田山1例参照） 1例【丹生の真朱】 1例（非地名説あり） 1例【乎度の多杼里】 1例【小新田山】（新田山か） 1例（三四〇五或本歌）
	下野国	○ 下野 ○ 赤見 ○ 美可毛	2 1 1	2例 1例【赤見山】 1例【美可毛の山】

圏外	陸奥国	● 陸奥	2	6 例 〈陸奥の真野の草原③三九六笠郎女〉〈陸奥の安太多良真弓⑦一三二九〉〈陸奥山 1 例⑧四〇九七家持〉〈陸奥の小田なる山 1 例⑧四〇九四家持〉
		● 安達太良	1	3 例 【安達太良の嶺・安達太良真弓各 1 例】〈安達太良真弓 1 例⑦一三二九〉
		○ 会津	1	1 例 【会津嶺】
	尾張国	○ 可家 <sup>かけ</sup>	1	1 例 【可家の水門】 <sup>かけ</sup> <sup>みなと</sup>
	● 須沙 <sup>すさ</sup>	1	2 例 【須沙の入江】〈⑪二七五一〉	
	越前国	● 多由比	1	3 例 【多由比潟】〈多由比が浦③三六六・三六七笠金村〉
	甲斐国	○ 都留	1	1 例 【都留の堤】
	筑紫国	● 筑紫	1	20 例 【筑紫なるにはふ兒】〈④五七四旅人他〉〈筑紫路・筑紫の山・筑紫の国〉* 題詞* 〈筑紫②四三四〇・四四一九・四四二二・四四二八〉 * 〈筑紫の島②四三七四〉〈筑紫の崎②四三七二〉〈筑紫辺②四三九五〉
	対馬国	● 対馬 <sup>つしま</sup>	1	3 例 【対馬の嶺】 〈対馬の浅茅山⑯三六九七遣新羅使歌〉 〈対馬の渡り①六二春日老〉
	大和国	● 明日香	2	36 例 【明日香川 2 例】〈東国か〉〈明日香川大和 17 例 + 東国 2 例か〉
		● 大和	2	62 例 【大和女 1 例含】〈①二舒明天皇他〉〈大和島③二五五人麻呂他〉〈大和島根②四四八七藤原仲麻呂他〉〈大和の国②四四六五・四四六六家持他〉〈大和路④四五五一未詳他〉
未詳	国未詳	○ 上志太 <sup>かむしだ</sup>	1	1 例
		○ 許曾 <sup>よ</sup>	1	1 例
		○ 故奈 <sup>こな</sup>	1	1 例
		○ 古婆 <sup>こば</sup>	1	1 例
		○ 左奈都良 <sup>さなつら</sup>	1	1 例 【左奈都良の岡】
		○ 佐和多里	1	1 例 【佐和多里の手兒】
		○ 息良祢 <sup>しる</sup>	1	1 例 【故奈の白嶺】
		○ 橘	1	1 例 〈多知婆奈の古婆〉
		○ 都武賀野 <sup>つむがの</sup>	1	1 例
		○ 等夜 <sup>とや</sup>	1	1 例 【等夜の野】
		○ 等里	1	1 例 【等里の岡道】
		○ 比多潟	1	1 例 【比多潟】(霞ヶ浦の一部とも)
		○ 松が浦	1	1 例
		○ 水久君野 <sup>みくくの</sup>	1	1 例
		○ 美都我野	1	1 例 (或本歌⑭三四三八)
		○ 美夜	1	1 例 【美夜の瀬川】(諏訪湖官川か)
		○ 美夜自呂	1	1 例
		● 木綿間山 <sup>ゆわたま</sup>	1	2 例 〈⑫三一九一〉
		○ 欲良 <sup>よら</sup>	1	1 例 【欲良の山辺】
	○ 小里 <sup>をさと</sup>	1	1 例 【小里なる花橘】	
	○ 乎那 <sup>をな</sup>	1	1 例 【乎那の峰】(遠江国か)	
計		106	187	

※1 [ ] は国推定地。○は東歌のみ(79地名)、◎は東歌と防人歌のみ3地名、●は東歌圏外の中央の歌にも存在(24地名、このうち5地名は東歌と防人歌に加えて中央の歌にも存在)。\*は防人歌を表す。

※2 東歌の地名は、相関「勸国歌」の「東海道」「東山道」の配置・編集の国別分類に従い、用例数並びにア行から降順に記した。

※3 山や嶺・峰に関する地名には下線を付した



倍」<sup>あらたま</sup>「<sup>きへ</sup>龜玉」は、古代東海道筋ではなく、浜名湖北を経て遠江国序・磐田へと通じる道の沿線（のちの姫街道）の地名である。東山道国境・信濃国の地名は、国名「信濃」を除きいずれも東歌のみの地名となっており（石井・宇良野・<sup>おほや</sup>大家・<sup>すが</sup>須賀・筑摩・埴科）、両者の相違が明確である。

- <sup>あらたま</sup>龜玉の<sup>きへ</sup>伎倍の林に汝を立てて行きかつまし  
しじ眠を先立たね（⑭・三三五三）
- 伎倍人<sup>まだらぶすま</sup>の斑袈に綿さはだ入りなましもの  
妹が小床に（⑭・三三五四）
- 遠江引佐細江<sup>とほつあふみ</sup>の滯標吾を頼めてあさま  
しものを（⑭・三四二九）
- 霰降り遠江<sup>あど</sup>の吾跡川柳刈りつともまたも  
生ふとふ吾跡川柳（⑦・一二九三・人麻呂歌集）
- <sup>あらたま</sup>龜玉の伎倍が竹垣編目ゆも妹し見えなば  
われ恋ひめやも（⑪・二五三〇）

古代東海道と東山道の自然環境も地名に反映している。当然のことながら、山や嶺・峰関連の「地名歌」に特色があり、【表三】下段の傍線を付した地名からも明らかのように、東歌にのみ見られるものも少なくない。古代東山道の「宇良野の山」（信濃国）をはじめ、上野国の山岳「伊香保嶺（伊香保の嶺ろ）」以下「新田山」「小新田山」「子持山」「安蘇山」「多胡の嶺」「久路保の嶺ろ」等はすべて東歌のみの地名である。また「赤見山」「美可毛の山」（下野国）、「安達太良の嶺」「会津嶺」（陸奥国）も同様である。東海道側にも「伊豆の高嶺」（伊豆国）、「鎌倉山」「相模嶺」「箱根の山（嶺ろ）」、「安伎奈の山」「和乎可鷄山」（相模国）、「安波峰ろ」「馬來田の嶺ろ」（上総国）、「小筑波（の）嶺ろ」「阿自久麻山」「葦穂山」（常陸国）等の東歌独自の山岳名が存在する。

東国圏外の地名にも、注目すべき現象が認められる。東西国境の西国圏に位置する古代東海道・参河国や古代東山道・美濃国の地名

は、東歌に詠まれない一方で、尾張国の「可家」や「須佐」が詠まれている。越前国「多由比」や甲斐国「都留」はさることながら、西海道「筑紫」「対馬」、さらには畿内「明日香」「大和」等も散見される。

『延喜式』所載の地名と比較すると、どのような特色が認められるのであろうか<sup>(注12)</sup>。東歌の異なり106地名のうち、東歌圏の34地名は国・郡・駅・伝馬関連の地名で、『延喜式』所載の東国地名が32%を占めている。これに対して、残る68%は東歌独自の地名なのである。『延喜式』所載の地名との一致率が高いのは、伊豆国100%で、これに遠江75%が続き、次いで67%を占める駿河国・上総国（東海道）、並びに下野国・陸奥国（東山道）の順となる。一致率が低いのは、東海道側に関しては常陸国20%、東山道側では上野国25%・信濃国57%となる。つまり、他の歌巻にも詠まれた地名との共有率が高い遠江国と、東歌独自の地名歌率の高い上野国・信濃国とが対比をなしているのである。

#### 4 おわりに

以上、『万葉集』巻一四所収の東歌の地名に着目して、防人歌や他の歌巻とも比較しつつ「地名歌」についての考察を行った。その結果、以下のような点が明確になった。まず、第一に東歌と防人歌の「地名歌」と「非地名歌」の比率は約6対4で東歌が優位に立つ。しかも、東歌「勸国歌」の「地名歌」が98%と高値であるのに対して、「未勸国歌」における「地名歌」は33%、また「地名初句歌」に関しては、「勸国歌」78%に対して「未勸国歌」20%と、「勸国歌」が「未勸国歌」の約4倍に相当する。

第二には、東歌に詠まれた地名総計は187、異なり106地名であるが、東歌圏の地名は総数156、異なり77地名である。これらのうち使用度数2以上の地名は109、孤例

の地名は78(題詞・左注含8地名)で、使用度数1の地名が78例・42%を占める。使用度数の高い地名は、「上毛野」13例(国名)、「足柄」(足柄の山・足柄山各1例含む)「伊香保」(伊香保嶺・伊香保の嶺ろ・伊香保風・伊香保せ・伊香保の沼各1例・東歌のみの地名)「筑波」(筑波嶺7例・筑波山1例含む)各9例、「武蔵」7例(武蔵野6例・武蔵嶺1例含む)「真間」6例(真間の浦廻1例含む)、「富士」5例(富士の嶺1例含む)。これらの地名を通して、近畿圏とは異なる東国地名の様相がうかがわれる。とりわけ上野国の東歌の「勸国歌」は25首と最多であるが、「未勸国歌」をも併せた「地名歌」に関しても上野国はトップである。地名総数・異なり地名数も同様で、47(25%・東国圏地名の30%)、20地名(13%・東国圏地名の26%)である。実際、上野国の東歌の地名はすべて東国圏での使用と見なされる。

第三に、東歌と防人歌との共通の地名は8例と少数である。これら8例のうち、東歌と防人歌にのみ見られる地名は、「多摩」「常陸」「碓日」の3例であり、東歌と防人歌に加えて中央の歌にも詠まれている地名は、「遠江」「駿河」「足柄」「筑波」「筑紫」の5例である。東歌と他巻共通の地名も24(東国圏17・以外7)ある一方で、79地名は東歌独自の地名と見なされる(東国圏57)。

第四に、古代東海道遠江国に関しては「引佐細江」のみが東歌地名であり、「伎倍」「匏玉」「遠江」は他巻「匏玉の伎倍が竹垣」(⑩・二五三〇)や「遠江の吾跡川」(⑦・一二九三・人麻呂歌集)等にも詠まれている。しかも、「引佐細江」「伎倍」「匏玉」は、公的な古代東海道筋ではなくのちの姫街道、すなわち浜名湖北を経て遠江国庁・磐田へと通じる沿線の地名である。東山道信濃国の地名は、「信濃」を除いて東歌のみの地名となっており(石井・大家・須賀に加えて郡名「筑摩・埴科」駅名「宇良野(浦野)」も東歌地

名)、東山道と東海道国境の地名表象に相違がある。殊に、古代東西国境に位置する西国圏の東海道参河国や東山道美濃国の地名は、東歌には詠まれない一方で、尾張国の「可家」や「須佐」の「地名歌」が認められる。越前国「多由比」や甲斐国「都留」、西海道の「筑紫」や「対馬」さらには畿内の「明日香」「大和」等も認められる。

第五に、東歌の異なり106地名のうち、東歌圏の34地名は国・郡・駅・伝馬関連の地名である。『延喜式』所載の東国地名が32%を占め、残る68%は東歌独自の地名である。『延喜式』所載の地名との一致率が高いのは、伊豆国で、次いで遠江国75%、さらに67%を占める駿河国・上総国(東海道)、下野国・陸奥国(東山道)と続く。一致率が低い国は、常陸国20%・相模国42%(東海道)、上野国25%・信濃国57%(東山道)である。以上のように、遠江国と上野国・信濃国とが対比をなしており、東歌の地名表象を通して古代の東西国境に位置した遠江国の特性が鮮明になる。

## 【注】

- (1) 「自陸往道者、荷緒縛堅、磐根木根履佐久彌、馬爪至留隈、長道无<sup>間</sup>、立都都氣、狭国者広、峻国者平、遠国者八十綱打挂<sup>引</sup>寄如<sup>事</sup>、皇大御神<sup>能</sup>寄奉<sup>波</sup>、荷前者、皇大御神<sup>能</sup>大前<sup>置</sup>、如<sup>二</sup>横山<sup>一</sup>打積置<sup>置</sup>、残<sup>波</sup>平間看」(祝詞・祈年祭)
- (2) 桜井満『万葉集東歌研究』桜楓社・一九七二年・23～24頁。
- (3) 和田明美「古代東海道と東西越境地域の「渡り」」(和田明美編『道と越境の歴史文化』青簡舎・2017年・65～68頁)。拙論「越境地域と文学-「坂(峠)」と「渡り」が創出する文字文化」(愛知大学三遠南信地域連携研究センター編『越境地域政策へり視点』2014年)並びに「古代日本語「しかすが」歌枕「しかすがの渡り」考」(『美夫君志』第96号・2018年)。
- (4) 福田武史は「「あづま」の国の成立」は、『古事記』には「東海道」は登場せず、逆に、『日本書紀』には「東方十二道」は一度も現れないこととともに、「東方十二道」が「東海道」の「前進と定位されている」ことを指摘する(『萬葉』199号・2007年)。

本居宣長も『古事記伝』において、「東方十二道、【日代の宮の段にも見ゆ、東海道なり】…景行の巻に、東山道、十五国など見え、孝徳の巻に、畿内の定め見えて…持統の巻に四畿内と云こと所々に見え…天武の巻に…又東海、東山、山陽、山陰、南海、筑紫と六道並びて見え…文武紀に、七道と見えたり」と説く。

- (5) 「この日、使を七道に遣して新令に依りて政し」(続日本紀・701年)。東海道・東山道を含め道別に七道すべてを記すのは、巡察使派遣に関する「正六位藤原房前を東海道に遣す。従六位上多治比真人三宅麻呂を東山道…(北陸道・山陽道・山陰道・南海道・西海道の順に七道を記す)道別に録事一人」(続日本紀・703年)である。
- (6) 竹尾利夫「参河・遠江国と古代東海道」は、『万葉集』に残る「東歌」と「防人歌」のありようは、遠江・信濃以東の国々が、畿内や西国とは異なる地域と認識されていたことを物語ってい

る。言葉や文化的な違いから日本列島を大きく東と西に分ける対立は、すでに古代から存在していた」と説く。また、従来の説を踏まえつつ、『古事記』『日本書紀』『常陸国風土記』『万葉集』等から流動的な三つの古代アズマの範囲を示し、そこに「ヤマト王権の東国への進出のあり方、もしくはその歴史的段階」を想定している(和田明美編『道と越境の歴史文化』青簡舎・2017年・40～41頁)。

- (7) 『延喜式』は、「東海道」を「伊賀国・伊勢国・志摩国・尾張国・参河国・遠江国・駿河国・伊豆国・甲斐国・相模国・武蔵国・安房国・上総国・下総国・常陸国の15ヵ国とし、「東山道」は「近江国・美濃国・飛騨国・信濃国・上野国・下野国・陸奥国・出羽国」の八ヵ国とする(巻二二・民部上「東海道・東山道」)。なお、「防人歌」には「東歌」に国名のある「伊豆」と「陸奥」二国の歌はない。また、天平勝宝7(755)年2月進上の「防人歌」84首の記載は(進上歌166首・拙劣歌82首)は、東海道の遠江国にはじまり(2月6日)、東山道の武蔵国(2月29日)に至る。

【表四】万葉集防人国歌別歌数(天平勝宝七年)

755年2月 進上	国名	進上歌 歌数	記載 歌数	記載率 %	拙劣 歌数	採取率
6日	遠江	18	7	8.33	11	38.89%
7日	相模	8	3	3.57	5	37.50%
7日(※9日)	駿河	20	10	11.9	10	50.00%
9日	上総	19	13	15.48	6	68.42%
14日	常陸	17	10	11.9	7	58.82%
14日	下野	18	11	13.1	7	61.11%
16日	下総	22	11	13.1	11	50.00%
16日	信濃	12	3	3.57	9	25.00%
23日	上野	12	4	4.76	8	33.33%
29日	武蔵	20	12	14.29	8	60.00%
合計		166	84	100	82	

- (8) 尾張国に関する歌は、「須佐の入江の隠沼」と「可家の水門」を詠む次の2首である。「須佐の入江」は愛知県南知多町豊浜の須佐湾、「可家の水門」は愛知県知多郡上野町大字加家から横須賀町大字横須賀に続く低地とされている(松田好夫説)。

なお三五三番歌の歌意に関しては「こてたずくもか入りて寝まくも」の解に諸説あって定説を見ない。この歌の地名表象と歌意についての詳細は別稿に譲る。

○あぢの住む須佐の入江の隠沼のあな息づかし  
見ず久にして (⑭・三五四七)

阿遲乃須牟須沙能伊里江乃許母理沼乃安奈伊  
伎豆加思美受比佐尔指天

○あぢかまの可家の水門に入る潮のこてたずくも  
か入りて寝まくも (⑭・三五五三)

安治可麻能可家能水奈刀尔伊流思保乃許弓多  
受久毛可伊里弓祢麻久母

- (9) 犬養孝『萬葉の風土続』塙書房・1972年。
- (10) 【表二】【表三】では地名の可能性のある名詞や連語も、地名としてカウントした。【表三】の万葉集国別東歌地名表では、国名や場所が特定しがたいものは  の形で記し、推定される国名・地名として明確なものとは区別した。
- (11) 伊藤博『万葉集の表現と方法 下』塙書房・1976年による。
- (12) 東歌における『延喜式』所載（一部一致の地名・別表記含む）の東国圏地名は、東海道・東山道の順に次の通りである。遠江国〔龜玉・引佐・遠江〕駿河国〔富士・安倍・志田・駿河〕伊豆国〔伊豆〕相模国〔足柄・鎌倉・相模・御宇良・余呂伎〕・武蔵国〔武蔵・入間・埼玉・多摩〕・上総国〔安波・海上〕・下総国〔葛飾〕・常陸国〔筑波・常陸〕、信濃国〔信濃・宇良野・筑摩・埴科〕上野国〔上毛野・多胡・碓氷・利根・新田〕・下野国〔下野・美可毛〕・陸奥国〔陸奥・会津〕。

### 【主な引用・参考文献】

- ・土屋文明『万葉集上野国歌私注』1944年・煥乎堂
- ・犬養孝『万葉の風土』『万葉の風土 続』塙書房・1956年・1972年
- ・正宗敦夫編『和名類聚鈔』風間書房・1962年
- ・山崎良幸『万葉歌人の研究』風間書房・1972年
- ・伊藤博『万葉集の表現と方法 下』塙書房・1976年
- ・桜井満他編『必携万葉集要覧』桜楓社・1976年。
- ・黒坂勝美編『新訂増補国史大系延喜式』吉川弘文館・1979年
- ・中金満『東歌の風土と地理』教育出版センター・1983年
- ・水島義治『萬葉集東歌の研究』笠間書院・1984年
- ・水島義治『萬葉集東歌本分研究並びに綜索引』笠間書院・1984年
- ・遠藤宏『古代和歌の基層』笠間書院・1991年
- ・清原和義『万葉集の風土的研究』塙書房・1996年
- ・和田明美『古代的象徴表現の研究』風間書房・1996年
- ・加藤静雄「東歌の持つ意味」（美夫君志会編『万葉史を問う』新典社・1999年
- ・和田明美「東歌に見られる序詞表現」美夫君志会編『万葉史を問う』新典社・1999年
- ・北川和秀『群馬の万葉歌』あかぎ出版・2002年
- ・木下良『事典 日本古代の道と駅』吉川弘文館・2009年
- ・北川和秀「上野東歌探訪」（『上州文化』No.122・2010年連載）
- ・鈴木靖民他編『古代山国の交通と社会』八木書店・2013年
- ・川尻秋生『古代の東国2 坂東の成立 飛鳥・奈良時代』吉川弘文館・2017年
- ・和田明美編『道と越境の歴史文化』青簡舎・2017年
- ・荒井秀規『古代の東国3 覚醒する〈関東〉平安時代』吉川弘文館・2017年